

(石井裕也監督宛公開書簡)

「シミュレーション～昭和 16 年夏の敗戦～」放送 1 周年に思う

映画「開戦前夜」監督 石井裕也殿

飯村 豊

2026 年 8 月 15 日

初めてお便り申し上げます。私は総力戦研究所初代所長、飯村穰陸軍中將の孫の飯村豊です。すでに貴方のテレビ番組「シミュレーション～昭和 16 年夏の敗戦」及びその映画版「開戦前夜」については、東京地裁に名誉毀損と上映禁止の訴えを起こしましたが(映画についての名誉毀損の訴えは近々に行います)、ここに井上樹彦 NHK 会長に続き、貴監督にも私との公開の対話を求めるものであります。

貴方は、昨年9月の NHK 稲葉延雄会長による定例記者会見において代読されたメッセージを通して貴方の映画におけるキャラクター設定についていずれ説明する旨約束しました。また、私は昨年 8 月以来当時接触があった NHK スペシャルのチームを通して貴方との対話の実現するようお願いしてきましたが、結局今に至るも貴方はプレスとも私とも何の接触も行っていません。このまま放置しておいても埒が空きませんので、この公開書簡をもって改めて対話の実現を求めます。

私はあなた方に対する訴訟、公開の対話、そしてマイクを握っての同志たちとの街頭活動を私の活動の三本の柱と考えています。

私は職業外交官として、一生の半分を海外で過ごし、現在は朝日新聞政治部 OB の友人と研究フォーラムを作り、30 名前後のジャーナリストや研究者、官僚 OB と研究会を月一回ほど行い、また政策提言を行ったりしています。

このままゆったりとした国際政治についての研究生活を行うつもりでしたが、昨年 8 月貴方が監督した「シミュレーション～昭和 16 年夏の敗戦」を NHK スペシャルで拝見し、私の生活の軸はすっかり変わりました。

<現代史を扱う>

貴方の作品は戦国時代や蒙古の来襲と言った古い昔の話に関わるものではなく、現代を対象としたものです。そういう気持ちで作るべきではなかったでしょうか。私は祖父飯村穰のもとで子供時代を過ごしました。貴方が描いた総力戦研究所をめぐる物語は私が生まれる前の話ですが、子供の頃から総力戦研究所の話は近所の田んぼや林を散歩しながら祖父からいつも聞いていました。また、ドラマに仮名で出てくる堀場一雄氏や白井正辰氏は世田谷の自宅によく訪ねて来ておられました。

貴方の映画における模擬内閣の総理大臣・宇治田洋一は実際には窪田角一氏と言う農林中央金庫に務めておられた方ですが、戦後祖父を中心に集まったOB会(総研一期生会)の幹事を熱心に務めておられました。この会は会員がお互いに深い友情に結ばれていたようで、よく祖父も会合に出席しており、同期生会報も送られてきていました。祖父が1976年に亡くなった時には追悼集を出してくださり、祖父と同様陸軍の将校であった父も寄稿していたことを覚えています。総力戦研究所設立の重要目的の一つである日本社会に根強かった組織やセクターごとの縦割り主義、セクショナリズムの打破に一石を投じていたことが窺われました。会報の一部は今でも私は大事に保管しています。貴方の映画のテーマの一つは祖父が研究生達の自由な議論に卑劣な手段で圧力を加え、シミュレーションの結果を開戦の方向に向けようとしたということにあります。この会報をお読みになれば貴方のストーリーが全くの捏造であることがわかります。

総力戦研究所と祖父の関係は、私自身の人生の一コマでもありました。貴方の映画はこのような生身の人間の大切な人生を扱っているのです。映画は創作物ですから何も事実をそのまま反映しろとは申し上げませんが、総力戦研究所を舞台にするからには私に取材くらいはしてもよかったのではないですか。東條英機大将のひ孫さんと食事を共にするよりもっと有益な話ができたいと思います。ここに貴方の作品のバイアスの兆候が示されているような気がしてなりません。

<飯村穰の戦争についての考え>

貴方は静かに余生を送っていた私の人生に突然ドタ履で入り込んで来られました。そし

て、フィクションの衣を被りながら、映画の骨格には史実を借用し、視聴者もしくは観客には実話を見ているとの錯覚を与えつつ、妄想に満ちたストーリーを作り上げました。貴方はそれをフィクションだから受け入れるべきだということです。

祖父は昭和9年、参謀本部欧米課長だった時に日米戦争の図上演習を行ったのを始め、機会あるごとに米国との戦争の危険性を指摘してきましたが、貴方は何の根拠もなく祖父を好戦的で卑劣な軍人として描きました。祖父の人物像を濃密に、かつ否定的に描きながら祖父の日米戦争に関する考えを全く無視しました。敗戦後も、祖父は一貫した日米戦争への考え方を評価されたのでありましょう、リベラルな外交官出身の幣原喜重郎氏率いる内閣では、戦争の原因は何であったかを追求する「戦争調査会」の軍事部会の委員長にも任命されました。

祖父の戦争についての考え方は、私が今年6月に出版した「総力戦研究所の真実一法廷に立つNHK」で触れました。特に「Ⅲ最新研究と資料から見る総力戦研究所」に添付した「戦争術に関する講話案」において明らかにされています。これは祖父が昭和15年12月に軍事について学んだことのない研究生に対して戦争についての考え方を語るために準備したのですが、これを読んだかつての私の外務省の同僚から大変に丁寧な感想が寄せられました。彼の感想文を引用します。「この講話案には心底驚かされました。これほど開明的で、時代の思潮に流されない方が当時の陸軍幹部の中にいたということが衝撃的でした。曰く、美人の眼が戦法の上(の)上、真に永久の勝利はこの勝利によるものであって、外国に対する戦争においてももっともっと反省して祖先に恥じない必要があるとの指摘は、日中戦争の当時余程の勇気がなければ口にするのも難しかったであろうと思い感服いたしました」と彼は述べています。講話案において、祖父は「(美人の)のひと睨みにより、相手を惹きつけその心の自由を奪い……」と述べ、暴力に訴えない戦争のやり方が最善であるとの考えを明らかにしていますが、250ページの私の著書のこの部分に着目したかつての同僚の慧眼にも感服いたしました。

また、祖父はこの講話案において、戦争は時間が経つにつれ、精神力よりも経済力が重要になることを説いています。この考え方が昭和16年夏の図上演習の基本的考え方になります。子供の頃から、祖父は私を隣の布団に寝かせ、欧米の「覇の兵術」を超えた日本の

「生の兵術」こそを学ぶべきと言っていたことを思い出します。当時は聞いていても全くわかりませんでした。が、国際関係が緊張し、戦争の危険が迫っている現在、祖父の寝物語の意味がわかって きました。

<歴史はエンターテインメントか>

私は、祖父の名誉を回復すると言った私情のみでは動いていません。公の怒りをもって、歴史の真実を求め、右から左までの多くの同志たちとともに、正義がなされるまで戦っていくつもりです。貴監督の作品は私が敬愛してやまない祖父の人格を全く根拠なく毀損しました。しかし、それよりも大切なことは、貴方の作品が歴史を真摯に捉えるとはどういうことかを問わせてくれる強力な反面教師であったことです。

貴方の作品をこのまま放置すれば、この種の映画が多く製作されることを懸念します。そして、多くの日本人は歴史をエンターテインメントの一つのカテゴリーとして受け入れるようになるでしょう。この前の戦争が何であったかという重大な問いを投げかけなくなるでしょう。このような事態は NHK スペシャルと言う番組枠が想定しているものではなかったと思います。NHK の 稲葉前会長が昨年 9 月に貴方の作品は NHK らしくなかったと述べられたのはそういうことを指していたのだと思います。歴史は国民が共有する公共財なのです。日本では古事記の昔から民族の最高の知性が切磋琢磨して歴史と向き合ってきました。

<これは反戦映画か>

最近になって、映画の主演の俳優さんが「この映画は新しいタイプの反戦映画」と言っているとの宣伝文句が流れていますが、仰天いたしました。この戦争につき全く勉強もせず、戦争の原因についても「空気」という以外何も語らず、どうやったら戦争に反対する真の力が生まれるのでしょうか。軍部の中であって祖父のように米国との戦争に反対していた人物を好戦勢力の一人にしてしまっていて、どうやって戦争に反対する人を力づけることができるのでしょうか。さらに言えば総力戦研究所の果たした歴史的な役割、シミュレーションが実際にどのように行われたかについても正確な知識も持たずにどうやったら反戦映画になるのでしょうか。

総力戦研究所に関する最新の研究の成果は、シミュレーションが映画のこのような研究所指導部(統監部)と若い研究生たちの二極構造ではなく、これに各省庁の高級幹部で構成される 審判部を入れた3極構造の中から出てきたことを明らかにしています。昭和14年に、秋丸次朗陸軍中佐は陸軍省内に著名な経済人たちを集め、英米などの国力を分析する通称「秋丸機関」と呼ばれるチームを作り、各国の国力が来るべき総力戦にどのように耐えていくかを研究しましたが、秋丸中佐は同機関解散後この審判部のメンバーになりました。秋丸機関の調査・研究が総力戦研究所の研究に相当程度の影響を与えた可能性があると思定されます。

映画「開戦前夜」が研究生の手柄のように語っている戦争のシナリオは統監部と審判部が研究生に課題として提供したものであって、研究生が自ら作った予測ではないことは、すでに東京裁判の国際検察局による尋問に対する 堀場一雄大佐の答えでも明らかになっています。ウェブ裁判長は当初総力戦研究所が戦争計画を作ったのではないかと疑っていたと言われています。堀場大佐はこの演習の目的が教育・訓練であったことを力説しています。その結果ウェブ裁判長の疑いが晴れましたが、さもないと研究生達は戦犯容疑の対象になっていたでしょう。

私は映画が反戦の有力な武器になりうることを否定しているのではありません。私はそれほど多くの映画を見ているわけではありませんし、映画人の貴方に対して不遜な振る舞いと思われるかもしれませんが、そのような映画として印象に残ったドキュメンタリー映画を二つだけ挙げておきたいと思います。

一つは、貴方は当然見ておられると思いますが、「ネタニヤフ調書」というネタニヤフ・イスラエル首相を対象にした最近の映画です。ネタニヤフ首相が自らの政治生命を守るためにパレスチナ問題を利用し、近隣諸国との戦争を引き起こしていることを鮮明に描きました。真の反戦映画とは何かを示していると思います。

もう一つは、1970年代初めにフランス留学中に見たフランスのドキュメンタリー映画「悲しみと哀れみ」です。この映画がフランス国民に与えた衝撃を今でも思い出します。それまで国民の大半がドイツに対するレジスタンスをやったという神話を信じていたフランス人に、

ヴィシー 政権下のフランスの対独協力の実態を突きつけました。反戦映画というよりも歴史を真摯に見つめることの重要性を示した映画だと思います。

二つとも、時代の風潮に媚びない知的誠実さが観客に強い印象を与えたと思います。

＜戦争の記憶と時間＞

戦争が終わって 80 年が過ぎました。時間は私たちの歴史観にどのような影響を与えるか。貴方はこの問題に真摯に向き合うべきだと考えます。「開戦前夜」を作るにあたって何が貴方 を突き動かしたのか、ご自身の心の中を見つめることが必要だと思います。

私は、戦争が終わって時間が経つにつれ三つのことが起きると考えています。一つは忘却です。何が起きたのか忘れてしまうのです。私たち日本人は忘却を阻止する努力をしてきました。言い換えれば「追悼」を心を込めてやってきました。

しかし、私はもう二つ重要な現象が起きると思います。この二つの現象を意識化する作業を日本人は往々にして忘れます。一つは過去のステレオタイプ化です。これはある意味で当然のことだと思いますが、時間と共に歴史の襞、歴史の 灰色部分が見えなくなるのです。全てが白黒、勧善懲悪のストーリーで語られる危険が増して 行きます。貴方の映画がその典型です。

もう一つは戦争がもたらす悲惨さの切迫性が低減する結果、戦争は政治や商業主義の玩具になっていきます。貴方の映画はこの点にも当てはまります。商業主義が先行しているのです。

＜歴史を語るには謙虚さと知的な誠実さが必要ではないか＞

誤解であれば良いのですが、作品を見たかぎり貴方には歴史を考える上で必要な謙虚さと知的誠実さが決定的に欠けているように思われます。第二次大戦を前にしての日本や世界の歴史をしっかりと学ぶことなく、過去の歴史を生きた人物像を思うがままに、あえて言えば妄想 のままに作り上げました。あなたは「開戦前夜」はフィクションだからどのように人間 像を作ろうと 自分の勝手だと言われるかもしれませんが、”シミュレーション”が行われた昭和 16 年の総力戦研究所所長は祖父飯村穰であり、シミュレーションを発意・監督し、組織 化

し、総理大臣官邸における報告会を行ったのは祖父であります。こうした歴史的枠組みを借用し映画を作っておきながら、所長の人間像はフィクションだ、飯村穰は関係ないと強弁するのはいかにも無理があります。飯村穰が総力戦研究所のシミュレーションから弾き出されれば、昭和16年の彼の居場所はどこにあるのでしょうか。その頃の彼は存在しなかったということになるのでしょうか。第3回口頭弁論で裁判長が言われた通り、板倉大道と飯村穰の同定性は現在進行中の裁判の一つの論点ですが、このような映画が白昼大手をふるって上映され続けることが許されるのか、近々に司法の判断が下されることを期待しています。

<私は貴方に三つのことを求めたい>

まず第一に「対話の約束」を守っていただきたいと思います。

すでに述べたとおり、昨年9月16日に行われた稲葉延雄 NHK 会長(当時)の定例記者会見において、記者から「(監督の)石井裕也さんはどのような意図でキャラクター設定を行ったのか」という質問が飛び、山名啓雄総局長(現副会長)はあらかじめ用意されていたあなたのコメントを読み上げました。「総力戦研究所内で描いたキャラクターは全員、原案書籍となったノンフィクションはもちろんのこと、残された資料や記録に基づいて創作しています。個人の人格や人間性を再現することがテーマではなく、当時の状況とそこに生きる人々の葛藤を伝えることが主眼の作品です。表現の理由と正当性については、しかるべきタイミングでお話することになります」これがあなたから記者団への回答でした。今になってもその「しかるべきタイミング」は来ていません。

あなたは、また7月19日に行われることになっていたプレミア試写会でお話をされる予定になっていましたが、その数日前に、神田の日本教育会館において試写会が行われた際、私達が街頭でマイクを握って上映の禁止を訴えたことを理由に、プレミア試写会自体をキャンセルしてしまいました。映画自体は7月31日に上映が開始されましたが、あなたは上映前に監督として作品について全く語ることはありませんでした。

貴方は沈黙の砦に立てこもっています。井上樹彦 NHK 会長は進行中の裁判を理由に

私との対話を拒否していますが、あなたは私のみならず「開戦前夜」に関心を持つメディアや一般国民との対話を拒否しているのです。あなたは自らの映画の制作について語ることを恐れているとしか思えません。映画人として、表現者として、このような不誠実な態度は多くの人にとって理解に苦しむものだと思います。

第二に、あなたは自らの作品をフィクションだと述べたり、史実だと言ったり、自らの作品の性格について言を左右にしています。

昨年12月24日に私は東京地方裁判所に対し、NHKスペシャルの番組につき名誉棄損の訴えを起しましたが、翌25日にはあなたが監督したこの番組の映画版「開戦前夜」の劇場公開が発表されました。制作委員会の声明においては、一方で「架空の名前の人物に特定のモデルはいません」と述べながら、他方で「昭和16年夏、総力戦研究所の研究生たちが首相官邸で研究報告を行い」、「報告会で日本は必ず敗戦すると発表されたものの、最後に報告内容と矛盾する所長の講評が行われ、研究生たちを憤慨させたとも記録されています」、「当初、自由闊達な議論を奨励したにもかかわらず、なぜ最後にこのようなことになったのか？私たちはここに着目しました」と述べています。要はこのドラマには、「モデルはいない」と言いな

がら、返す刀で研究生を憤慨させる講評を行った所長の振る舞いに着目した」と主張、これがきっかけとなって映画を作ったとしています。

「モデルが誰か」を自ら明らかにしているのではないですか。しかも、猪瀬直樹氏の著作の不正確な部分、すなわち「所長が講評を行ったという」部分に飛びついているのです。この点については私の著作で詳論しているので繰り返しません。飯村穰がこのような講評をおこなった痕跡はありません。貴方が猪瀬直樹氏以外の資料を精読していないことを示しているように思います。

最近では、貴方の映画の宣伝の中で「歴史に葬られた『不都合な真実』がスクリーンで牙を剥く」とノンフィクション性が、恥ずかしげも無くうたわれるようになりました。あなたの言葉には何の重みもないのです。くるくる変わるのです。これを不誠実と言わずしてなんでありましょうか。貴方の映画は何なのか、貴方の口ではっきり述べていただきたい。

第三に、私はあなたが歴史の真実に正面から向き合おうとしていないのではないかと思います。知的誠実さの欠如です。単に私と言う生身の一次資料にぶつかってみようとしたことが一回もないのみならず、あなたはどのような歴史資料、さらに言えば総力戦研究所に関する資料を読み込んでいるのでしょうか。間違いであつたら教えていただきたいのですが、あなたは猪瀬直樹氏の「昭和 16 年夏の敗戦」しか読んでないのではないですか。それも初めから終わりまできちんと読んだのでしょうか。もし読んだとしたらなぜここまで猪瀬直樹氏の著作から逸脱したテレビドラマ・映画を作る事ができるのでしょうか。さらに言えば、あなたは第二次大戦前の歴史についてどこまで学んだのか教えていただきたいと思います。歴史をテーマにした映画をつくると決意した以上「歴史についての学び」は不可欠です。あなたが私との対話に応じてくださったときには、この前の戦争につき、じっくりと議論できるのを楽しみにしています。

最後に繰り返しになりますが、私はあなたに歴史は民族が持っている公共財であることを理解していただきたいと思います。あなたは映画人として日本民族の知的営みに参加しているわけであり、私たちはそれにふさわしいあなたの行動を期待しています。(了)